

用水マップ

姉川周辺



② 平地に堤を築いて造られた溜め池。小室藩主小堀遠州が造ったと伝わる



① 物部の守屋が造らせたと伝わる小谷山麓の溜め池。農水省の「ため池百選」「滋賀のため池50選」に選ばれている



③ 国営。堤高2.0m、堤長52.1m。越流型鋼製格構造ローラーゲートという形式。昭和59年3月に造られた



④ 昭和28年建設。灌漑期は毎秒約3トン、非灌漑期は毎秒約1トンを取水（17頁参照）



⑤ 小田分水からの水を井之口と長浜へ分水（28頁参照）



かつて使用された井堰のハンドル



⑩ 長浜市東上坂町（26頁参照）



⑧（26頁参照）



⑦ 姉川から取り込んだ伏流水が流れ出てくる底樋の口（31頁参照）



⑥ 小田分水からさらに5つの川に分水する（28頁参照）



⑪ 長平成23年に完成した「馬井底樋記念公園」（31頁参照）



⑨ 姉川から取水する装置（17頁参照）



前田俊蔵を思い 夜叉ヶ池をめざす 「晴れ、時々雨乞い気分」

今回のあやしいメンバー

隊長：太田
隊員：西岳人 梶村 メイ あめ

「今回のあやしい取材班はどこへ行くのか」

2度目の編集会議で持ち上がった話題である。人柱や龍神伝説、水にまつわるあやしい話は数えきれない。

「ただの伝説じゃ、おもしろくない」

「やはりみくなの一記事となると史実に基づく事柄がほしい…」
ざわつく編集室内にナイスな提案が舞いおる。

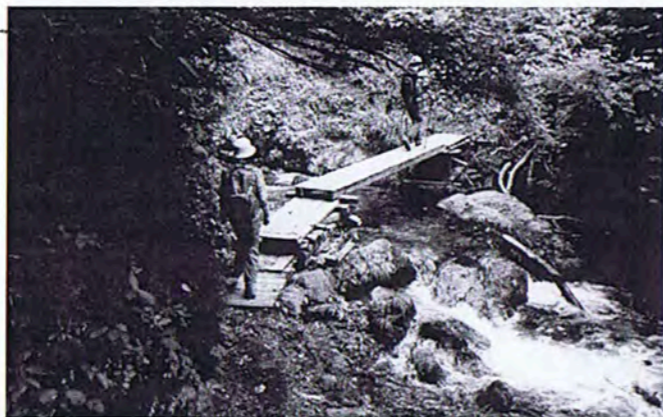
「夜叉ヶ池に行きませんか、前田俊蔵の雨乞いのこともありまし」

「それは賛成ですね、北国街道の特集(116号)でもふれていたし何より事実がある！」

行き先が決まりとんとん拍子に進んでいく。「水・日照り・雨乞い・登山」、少し不謹慎な気もするが、わくわくする単語が並んでいる。私ももちろん「参加します！」だった。



▲山の上にあるという神秘的池を目指していざ！…



▲心地よい流れの川を渡る。こんな道が続いているものと安心しきっていたが…



▲「隊長、つかまってください！」トレッキングポールが命綱



▲目指す夜叉ヶ池はあの壁の向こう



▲幽玄の滝で美肌を願う女子隊員

郷土の義人・前田俊蔵

夜叉ヶ池は岐阜・福井県境の夜叉ヶ池山と三周ヶ岳との鞍部にあり、昔から水が枯れない不思議な池である。そのため雨乞いにまつわる「龍神伝説」が多く伝えられてきた。泉鏡花が書いた戯曲「夜叉ヶ池」のモデルでもある。

今でこそ、蛇口をひねればきれいな水が当たり前のように出てくる時代だが、昔はそうはいかなかった。湖北でも日照りが続き農業用水はおろか飲み水すらなくなろうとしていたとき、一人の青年が雨乞いを決意し夜叉ヶ池に向かった。今回はその義人・前田俊蔵を敬い、夜叉ヶ池を目指すことにしたのだ。

登山をする前に前田俊蔵に触れておきたいと思う。

生まれは伊香郡高月村(長浜市高月町高月)、生まれつき清廉正直で家族を大切にし、品行方正で幼い時から勉学にいそしみ几帳面な性格だったそう。

湖北からは夜叉ヶ池付近の山々は望めないが、岐阜県の坂内村と昔からつながりがあったため、その伝説と神秘性が伝えられたのかもしれない。そうだとすると、勤勉だった俊蔵が知らないうちはずはないだろう。

湖北の日照りと前田俊蔵の決意

雨乞い伝説は人柱となった娘が龍神に嫁ぐ話が一般的であるが、夜叉ヶ池にはただそれだけではなく「水が枯れたことがない」という神秘的な魅力があり、雨乞いをしに行く理由としては強く惹かれるものがあるだろう。

高月観音堂(大円寺)の碑文によると、次のようなことが記されている。明治16年の夏、何もかもが今にも枯れて死んでしまいうような日照りが百日余りも続いたそうだ。

ついに8月4日、高月・宇根・落川の3ヶ村民(下井3ヶ村)は高時川の餅の井落としを決行したが、水は途中で尽き、村までは流れてこなかった。そこで俊蔵は仲間とともに夜叉ヶ池に行き龍神に祈ろうと決意したが、夜叉ヶ池の神主が「神のお怒りに触れては恐れ多い」といって登山することを許さなかった。しかし彼らは山道を5里(約20km)ほど辿って夜叉ヶ池に到達し、龍神に3日間黙祷を捧げた。祈り終え、越前道を回って帰ってきたところ、まだ家にも帰りつかないうちに暗雲たちこめ大雨が降り、枯れていた苗もみなことごとくよみがえった。

8月23日、俊蔵はひとり衣服をあらためて野神塚(近畿地方に分布する稲

作の神様)の上で、龍神に感謝を込めて自刃した。

駆けつけた警察官が呼吸を見たところ息は絶えていなかったため理由を尋ねるが、話すことができない。休からあふれる血で桐の葉に書くが字が乱れる。警察官が矢立てを差し出すと「先日、雨を祈った時、もし雨を恵まれたならば私の命を捧げますと誓ったのだ。今それを果たしたまでだ」と書き、につこり笑って亡くなった。享年28歳。

以上をふまえ、我々あやしい取材班一行は心して夜叉ヶ池を目指すことにした。

雨乞いへの道は、道なき道

「今日は朝曇りやで晴れそうやなあ」。朝、出発の準備をする私に母が言った。暑すぎるのも嫌だが絶好の登山日和になりそうだ。また、雨乞いの方がいいがあるというものだ。

「郷土の義人 前田俊蔵」には「俊蔵らが雨乞いのために夜叉ヶ池を目指した道は川合―金居原―八草峠―川上村に至る片山―掛斐道(現国道303号)を利用され」と記されている。

午前8時に豊公園駐車場に集合したあやしい取材班は、俊蔵らと同じ道のりを車で走る。途中まだ青々とした田

んぼを眺めていると、あつという間に八草トンネルを抜け岐阜県に入る。道なりに進むとだんだん道が細くなっていき駐車場にたどり着く。車でも大変な道のりを彼らは歩いて行ったのだと思うと、また思いは一入である。

登山届を出し9時40分ごろ登山を始める。登山といえども、いったん沢に降り緩やかな道を登っていく。水が豊富なためか、いたるところで谷の沢水がきらめき、さわやかで気持ちがいい。こんな道が続いているものだと安心しきっていた。しかし、そんなはずはなく取材班には数々のトラップが仕掛けられていた。

少し飛び出た岩や木の頭をのりこえ、西隊員のトレッキングポールを命綱にして川を横切ったり、ブナの木を飛び越えたり潜り抜けたりと、とにかく足場が悪かったが、ふと顔をあげると壮大な自然と涼しげな水音に元気づけられた。

途中小雨がぱらついてきた時は「雨が降ってきたような気がします」「まだたどり着いてもいいのに？」「いや、ここは山だからきつと湖北は快晴のはずです」と、少し焦りながら雨乞い達成を願ってぐんぐん進んだ。